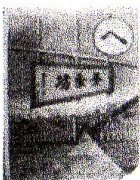


養蚕場額

道開拓使は大野村向野に養蚕場を設けた。施設も整った明治11年(1878)、長官黒田清隆は視察し額に「養蚕場」と揮毫した。養蚕場は閉じられ、変遷を経て大野農業学校の用地となった。

額は旧事務所から見つかり、大野での保管場所はなく、昭和30年(1955)函館図書館に寄贈した。



鉄道開通 (函館駅—本郷駅)



鉄道は函館駅から本郷駅(後、渡島大野駅に改称)まで明治35年(1902)開通し、

順次札幌へ伸びていった。

駅の位置は本郷に設けられる予定が変更し市渡になったため中心街より大きく外れてしまった。

幻の大函電鉄 (海岸町—大野)

大野村や函館市の人が発起人となって、函館から大野まで急行電車を走らせようとした。

工事はある程度進捗したが資金・資材不足、線路用地を巡って争いとなり思うように進まず、昭和12年(1937)認可取り消しとなり、幻の大函電鉄となった。

江差山道 (市渡村—江差)

道では道路の整備に取りかかり市渡村から江差まで明治18年(1885)に着工した。

ほぼ大野川に沿いつつ基本的に山を発破も使用して崩し、翌19年に完成させた。



この工事の様子は鶴山道石版画45景(市文化財指定)に描かれ残っている。

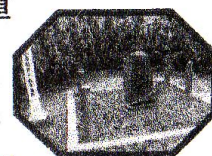
大野新道 (大野十字街—亀田村)

江差山道完成の翌明治20年(1887)大野十字街から亀田村(現函館亀田)までの新道に着工した。路面が軟弱で土盛りに手間が掛かり同22年、3年で新道が完成した。直線約12キロだった。

これで大野を中継地として函館から江差まで近代的な道路となった。

三角測量 (一本木村—亀田村)

明治になり道内の内陸調査が急がれた。勇払・鶴川間を基線とし、道南の一本木村・亀田村(現函館田家)間を補助基線にして三角測量が進められた。



大野地区一本木には当時からの標石があつて道文化財指定となっている。

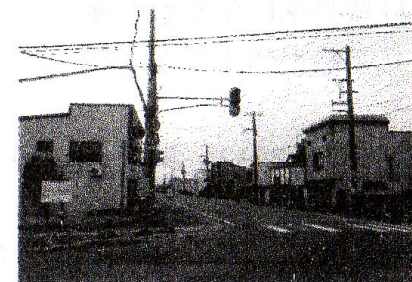
大野と函館

歴史のかかわり

講演資料にリーフレットを活用

大野と函館のかかわりを探る

《各所に説明板がたっている》



大野十字街

◆問い合わせ；北斗市郷土資料館
041-0112 北斗市本町2丁目12番7号

大野文化財保護研究会

(略称；文保研・ぶんぽけん)

2013年3月